

NEW JAPAN
*P*HILHARMONIC
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団
2023/2024シーズン



2023

6

June

7
July

2023/2024 シーズン
新日本フィルハーモニー交響楽団 6, 7月演奏会

Contents

トリフォニーホール・シリーズ / サントリーホール・シリーズ #650 石川亮子	1
すみだクラシックへの扉 #16 小室敬幸	7
楽員ストーリーズ ③⑤ 立上 舞 (アシスタント・コンサートマスター)	13
NJP from Inside	14
NJP 9月公演 柴田克彦の鑑賞ポイント	17
2023 / 2024 シーズン 定期演奏会プログラム	18
室内楽シリーズ	23
「バトロネージュ・システム」のご案内	30

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

CCC

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業／団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

〈コンサートの感想をお寄せください〉

演奏会終了後1週間以内にご回答いただいた方の中から、抽選で10名様に新日本フィルオリジナルグッズをプレゼント!

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。プレゼントの当選者にはメールにてご連絡させていただきます。culture@njp.or.jpからのメールが受信できるようご設定をお願い致します。



<https://forms.gle/nzYkJLAuZG1tfYY36>

いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムでご紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。

〈ご来場のお客様へのお願い〉



Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2023-2024 Season

#650

6.24 [土]

トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第650回定期演奏会
2023年6月24日(土) 14時00分
すみだトリフォニーホール

6.25 [日]

サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第650回定期演奏会
2023年6月25日(日) 14時00分
サントリーホール

●ドビュッシー (1862-1918)

牧神の午後への前奏曲

Claude Debussy: Prélude à l'après-midi d'un faune

約10分

●ストラヴィンスキー (1882-1971)

バレエ組曲『火の鳥』(1919年版)

Igor Stravinsky: "L'oiseau de feu", Ballet Suite (1919 version)

約20分

- I. 序奏 Introduction
- II. 火の鳥とその踊り L'oiseau de feu et sa danse
- III. 王女たちの Rond (ホロヴォート) Ronde des princesses (Khorovode)
- IV. カスチエイ王の魔の踊り Danse infernale du roi Kastcheï
- V. 子守歌 Berceuse
- VI. 終曲 Final

—— 休憩20分 ——

●ベルリオーズ (1803-69)

幻想交響曲 — ある芸術家の生涯のエピソード — op. 14

Hector Berlioz: Symphonie fantastique: épisode de la vie d'un artiste, op. 14

約55分

- I. 夢・情熱 Rêveries-Passions: Largo – Allegro agitato e appassionato assai
- II. 舞踏会 Un Bal: Valse. Allegro non troppo
- III. 野の風景 Scène aux Champs: Adagio
- IV. 断頭台への行進 Marche au Supplice: Allegretto non troppo
- V. 魔女の夜会の夢 Songe d'une Nuit du Sabbat: Larghetto – Allegro

[指揮] シャルル・デュトワ

Charles Dutoit, Conductor

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙 / 西江辰郎 / 伝田正秀

Munsu Choi, Tatsuo Nshie and Masahide Denda, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール [6/24公演]

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))

独立行政法人日本芸術文化振興会

公益財団法人アフィニス文化財団

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。



文化庁



©Chris Lee

シャルル・デュトワ [指揮] Charles Dutoit, Conductor

1936年スイスのローザンヌに生まれ、現地やジュネーブで学び、大指揮者アンセルメやミュンシュに師事、1964年にベルン響を指揮してデビューした。

以降、欧米の主要楽団を数多く指揮するが、デュトワの名を一躍世界のスターダムに押し上げたのは、1977年より音楽監督を務めたモントリオール交響楽団との活動である。同団を「フランスのオケ以上にフランス的に」魅力的に育て上げ、世界ツアーやデッカ・レーベルのCDで一世を風靡、数多くの賞を獲得するとともに、世界中の音楽ファンはデュトワが創り上げた音色の魔術に熱狂した。ほかにもフランス国立管の音楽監督、フィラデルフィア管首席指揮者を歴任し、ベルリン・フィルやバイエルン放送響、ボストン響など欧米の主要オーケストラへ定期的に客演。

1996年にはNHK交響楽団の常任指揮者に就任、音楽監督を経て、2003年より名誉音楽監督。意欲的なプログラミングを行い、数々の作品を日本初演したほか、タン・ドゥンやグバイドゥーリナ、ペンデレツキ、リーバーマン、細川俊夫に新作を委嘱。フランス系のレパートリーを多数取り入れ、同団の一時代を築いた。2018年にはサンクトペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団の首席客演指揮者に就任。

デュトワは多くのオーケストラと共にフランス音楽を軽やかに明快なタッチで描き、ラヴェル、ドビュッシーといったフランス音楽の神髄を、深いレベルで聴衆に伝える。また、独特のリズム感で指揮するストラヴィンスキーやメシアンなどの近・現代音楽や、バレエ音楽でも常に高い評価を得ている。ほかにもPMFや宮崎国際音楽祭の芸術監督を務めるなど、日本のクラシック界へ大きく貢献。日本のみならず中国でも、誰よりも早くフランス国立管やN響とツアーをし、音楽祭に参加するなど、新しい領域へ飛び込む姿勢を持ち、世界中の聴衆に音楽の素晴らしさを伝えてきた。80歳を迎えた2016年には、平和を祈り、ブリテンの「戦争レクイエム」を世界各地で指揮した。

各地での勲章や博士号の授与も多い。録音の数は200以上に上り、2度のグラミー賞をはじめ数々の栄誉に輝いている。

音楽は音だけで完結しているのか、それとも音以外のもの（例えば、風景や物語、心情など）を描き出すのか——。19世紀ロマン派の後半において、絶対音楽と標題音楽として議論された問いに、もちろん答えなど出るはずもなかった。本日演奏されるのは、詩、舞踊、物語から生まれた作品である。音楽は音以外のものを知らなくても、十分に楽しめる芸術である。でも描かれているものが分ると、もっと楽しめるかも知れない。諸芸術からのインスピレーションが音楽を豊かにしてきたのだから。

■ドビュッシー：牧神の午後への前奏曲

新世界に扉を開く▶

真昼のシチリア島。目を覚ました牧神は葦笛を吹こうとして、水浴びをするニンフたちの姿を見る。牧神はニンフたちを追いかけ、ふたりのニンフを腕に抱くも逃げ去られる。疲れた牧神は、再び眠りへと落ちる——。マラルメの詩『牧神の午後』にインスピレーションを得て作曲された「牧神の午後への前奏曲」（1894年初演）は、クロード・ドビュッシー（1862～1918）がシェーンベルクやストラヴィンスキーに先駆けて、近代音楽の扉を開いた作品として高く評価される。

音楽の特徴▶

その音楽の新しさは、冒頭のフルート独奏から明かであろう。全音階に半音階を組み合わせ、ホ長調かと思えばそうとも言い切れない、夢と現実の間をたゆたう、マラルメの詩の世界そのままのメロディー。これを第1主題とすると、第1主題が毎回異なるハーモニーと楽器で色付けられて奏でられていき、やがてオーボエ独奏による第2主題が出る。調号が**b5**となり、美しい弦楽器による響きを主体とする中間部。そして冒頭の第1主題が戻って来る。すなわちドビュッシーがここで生み出したのは、既存の形式のどれでもあってどれにもよらない音楽であり、楽器編成についても、4本のホルン以外の金管楽器、アンティークシンバル以外の打楽器を用いることなく、ハープ2台を使った、弱音志向の厳選されたものとなっている。

[楽器編成]フルート3、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、アンティークシンバル、ハープ2、弦楽5部。

■ストラヴィンスキー：バレエ音楽『火の鳥』組曲（1919年版）

28歳の出世作▶

20世紀を生きたイーゴリ・ストラヴィンスキー（1882～1971）は、常に時代と呼吸しながら、その音楽を変幻自在に変化させた「カメレオン作曲家」だった。ディアギレフ率いるロシア・バレエ団のために書かれた、『火の鳥』『ペトルーシュカ』『春の祭典』の「三大バレエ」。その第1作、1910年に

パリ・オペラ座で初演された『火の鳥』は、ロシアの若き作曲家ストラヴィンスキーが、ヨーロッパにおける芸術の中心地パリへと躍り出る、文字通りの出世作となった。

ロシア民話を
組み合わせた台本

ロマンティックでエキゾチック、そして渦巻き爆発する原始的な力。振付のフォーキンがロシア民話を組み合わせて台本を作り、作曲はフォーキンとの共同作業のなかで進められた。『火の鳥』は師リムスキー=コルサコフの強い影響下にありながらも、ストラヴィンスキーが格別好んだドビュシーを吸収し、『春の祭典』であらわになる原始主義へと向かう、まさに過渡期の作品と位置付けることができる。

2管編成による
1919年版組曲

バレエ音楽『火の鳥』からは3つの組曲が作られている。まずストラヴィンスキーは4管編成のオーケストラはそのままに5曲を選び出し(1911年版)、続いて2管編成に縮小して6曲(7曲の数え方もある)にしたものを(1919年版)、さらにアメリカ移住後、著作権収入を見込んで曲数を増やした新しい組曲を作成した(1945年)。本日演奏されるのは、しばしば演奏され人気も高い1919年版である。以下にストーリーと、組曲の6曲について紹介しておこう。

6曲の特徴

舞台は怪物カステイの支配する、暗い夜の魔法の国(序奏)。火の鳥が登場し、軽やかに飛び回る(火の鳥とその踊り)。王子に捕らえられた火の鳥は、一枚の羽根と交換に逃がしてくれるよう懇願する。火の鳥が飛び去ると、王女たちがあらわれ(王女たちのロンド)、王子は王女のひとりと恋に落ちる。

カステイの手下たちに捕らえられた王子。羽根を出すと火の鳥があらわれ、その魔法でカステイたちは激しく踊り狂う(カステイ王の魔の踊り)。疲れて倒れこんだ怪物たちを火の鳥は眠りに誘う(子守歌)。王子はカステイの命の卵を地面に投げつけ、カステイは死ぬ。人々の魔法が解け、王子と王女は結ばれる(終曲)。

[楽器編成]フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、吊しシンバル、トライアングル、タンバリン、シロフォン、ハープ、ピアノ(チェレスタ)、弦楽5部。

■ ベルリオーズ：幻想交響曲—ある芸術家の生涯のエピソード— op. 14

フランス・ロマン派
音楽を主導

フランス・ロマン派を象徴する3人の芸術家、ドラクロワ、ユゴー、ベルリオーズ。19世紀フランスに絵画、文学、音楽の分野で花開いたロマン派において、エクトール・ベルリオーズ(1803~69)が評論家として文筆活動を行いながら(その意味では、シューマンも同様である)、大規模かつ革新

的な管弦楽法によって、ベートーヴェン以降のオーケストラに新たな音色と表現の幅をもたらしたことは、今も色あせない功績であろう。

「田園」を意識

「幻想交響曲—ある芸術家の生涯のエピソード—」は、ベルリオーズ初の交響曲として、1830年12月5日にパリ音楽院のホールで初演された。標題付きであること、5楽章からなること、さらに慣例的な交響曲の4つの楽章に、標題的なストーリーを描くための第4楽章が挿入されていること。これらはすべて、「幻想交響曲」がベートーヴェンの交響曲第6番「田園」を手本とするものであることを示している。

独創的ストーリー、
多彩なオーケスト
レーション

それと同時に「ある芸術家」がベルリオーズ自身であるところに、ロマン派的創作としての特徴があらわれている。確かに、物語はベルリオーズ自身の失恋体験(1827年秋、シェイクスピア劇団の主演女優、ハリエット・スミッソンに一目惚れするも全く相手にされなかった)をもとにしているものの、作曲時にはすでに別の恋人がおり、1830年は念願のローマ大賞を獲得した年でもあった。つまり奇抜なストーリーと極彩色のオーケストラという、驚くべき想像力(まさに幻想)と一体となった交響曲でベルリオーズは勝負に打って出たのであった。

5楽章の構成と
音楽の特徴

各楽章には「固定楽想(イデー・フィクス)」、すなわち同じ恋人の旋律が場面に合わせて変化しながら登場する。以下に交響曲としての書法と、その標題を確認しておこう。

第1楽章「夢・情熱」は序奏付きのソナタ・アレグロ楽章。芸術家の情熱的な日々と、恋人との出会い(第1主題として、恋人の旋律が姿をみせる)が描かれる。

第2楽章「舞踏会」はワルツによる舞曲楽章。芸術家は寝ても覚めても恋人の幻影を追いかけて、ついに舞踏会で踊る恋人と再会する。

第3楽章「野の風景」は緩徐楽章にあたる。舞台上のコーラングレ(イングリッシュホルン)と舞台裏のオーボエが、羊飼いの吹き交わしを表現する。田園で恋人を思うも失恋の予感が去来する。

第4楽章「断頭台への行進」は、オペラ『宗教裁判官』のために書いた音楽を再利用したもの。報われない愛にアヘンを飲み干した芸術家は、悪夢のなかで恋人を殺し、自分も断頭台で処刑される。

第5楽章「魔女の夜会の夢」は、悪霊や魔女たちが乱舞するフィナーレ楽章。鐘の音が響き、グレゴリオ聖歌の「怒りの日」が引用される。

[楽器編成]フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュホルン持替)、クラリネット2(Es管クラリネット持替)、ファゴット4、ホルン4、トランペット2、ホルネット2、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ2、大太鼓2、小太鼓、シンバル、鐘、ハープ2、弦楽5部。

ほほえみがふえていく、
未来がいいね。

オリックスグループは、
サステナブルな社会をめざして、
環境保全や、未来を担う子どもたちへの支援など、
社会貢献活動に取り組んでいます。

マングローブの植樹活動

学校建設の支援

福祉車両の寄贈

自然体験教室の開催

クラシックコンサートに
子どもたちをご招待

子ども食堂への支援

子どもの教育支援
© Room to Read

宝塚歌劇団 舞空瞳

● ヴィラ=ロボス (1887-1959)

ブラジル風バッチャ第4番より

Heitor Villa-Lobos: Bachianas brasileiras No. 4

- I. 前奏曲 Prelúdio (Introdução): Lento
IV. 踊り Dansa (Miudinho): Miuto Animado

約10分

● ロドリゴ (1901-99)

アランフェス協奏曲 *

Joaquín Rodrigo: Concierto de Aranjuez *

- I. Allegro con spirito
II. Adagio
III. Allegro gentile

約20分

—— 休憩20分 ——

● ヒナステラ (1916-83)

バレエ音楽『エスタンシア』組曲 op. 8a

Alberto Ginastera: Estancia Suite, op. 8a

- I. 農場で働く人々 Los trabajadores agricolas: Tempo giusto
II. 小麦の踊り Danza del trigo: Tranquillo
III. 大牧場の牛追い人 Los peones de hacienda: Mosso e ruvido
IV. 終幕の踊り(マランボ) Danza Final (Malambo): Allegro - Tempo di malambo

約10分

● ビゼー (1838-75)

『アルルの女』組曲 第1番(全曲)、組曲第2番より 間奏曲、ファランドール

Georges Bizet: "L'Arlésienne"

約20分

Suite No.1 I. 前奏曲 Prélude: Allegro deciso (Tempo di marcia)

II. メヌエット Minuetto: Allegro giocoso

III. アダージェット Adagietto: Adagio

IV. カリヨン Carillon: Allegretto moderato

Suite No.2 II. 間奏曲 Intermezzo: Andante moderato ma con moto

IV. ファランドール Farandole: Allegro deciso (Tempo di marcia)

[指揮] ジョゼ・ソアレス

José Soares, Conductor

[ギター] 村治佳織 *

Kaori Muraji, Guitar *

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙/伝田正秀

Munsu Choi and Masahide Denda, Concertmaster

■主催: 公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催: すみだトリフォニーホール

■助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))
独立行政法人日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

Profile



© Daniela Paoliello

ジョゼ・ソアーレス [指揮] José Soares, Conductor

ブラジル、サンパウロ市出身。2021年、23歳で第19回東京国際音楽コンクール〈指揮〉第1位、及び聴衆賞を受賞。副賞としてハンガリーでブダペスト交響楽団を指揮。2022年、入賞デビューコンサートでNHK交響楽団を指揮。

合唱指揮者の母アナ・ヤラ・カンボスのもと、幼少期よりピアノと合唱を学ぶ。クラウディオ・クルス氏に師事。2016-17年、カンボス・ド・ジョルドン冬季国際音楽祭(ブラジル)でマリン・オルソップ、アルヴォ・ヴォルメル、ジャンカルロ・ゲレロ、ニール・トムソン、アレクサンダー・リープライヒの各氏に師事。17年には同音楽祭で指揮賞を受賞。18年、サンパウロ交響楽団の客演アシスタント・コンダクターに招かれる。19年、バルヌ音楽祭(エストニア)でパーヴォ・ヤルヴィ、レオニード・グリーン各氏に師事。23年にはNJPのほか、広島交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団への客演も予定されている。現在、ミナス・ジェライス・フィルハーモニー管弦楽団(ブラジル)のアソシエイト・コンダクター。



© Kazumi Kiuchi

村治佳織 [ギター] Kaori Muraji, Guitar

幼少の頃より数々のコンクールで優勝を果たし、ピクターより15歳でCDデビューを飾る。1996年には、イタリア国立放送交響楽団との共演がヨーロッパ全土に放送され好評を得た。フランス留学から帰国後、積極的なソロ活動を展開。N響ほか国内主要オーケストラ及び欧州のオーケストラとの共演も多数重ね、2003年英国の名門DECCAと日本人としては初の長期専属契約を結ぶ。受賞歴も多く、第5回出光音楽賞、村松賞、第9回ホテルオークラ音楽賞、ベストドレッサー賞(学術・文化部門)、ブルガリ アウローラアワード2019を受賞。2012年NHK-Eテレ「テレビでフランス語」や、J-WAVE(FM)のナビゲーターなど、多数の番組に出演。2018年9月にリリースした『シネマ』は、第33回日本ゴールドディスク大賞を受賞。2019年12月には、サントリーホール・大ホールにてソロリサイタルを行い、満席の中成功を収めた。2021年5月公開、吉永小百合主演映画『いのちの停車場』のエンディングテーマを作曲・演奏。2022年3月、テレビ朝日「徹子の部屋」に4回目の出演。村治佳織OFFICIAL HP <http://www.officemuraji.com>

Program Notes ● 小室敬幸 [音楽ライター]

ヴィラ=ロボスはブラジル出身なので母語はポルトガル語だが、血筋はスペイン系。ヒナステラはアルゼンチン出身なので母語はスペイン語だが、父はスペイン系で母はイタリア系……といったように、南米の豊かな文化は、混血によって生まれたものといっても過言ではない(しかし言うまでもないことだが、それによって植民地時代の虐殺と搾取が正当化されるわけではない、念のため)。

スペインもヨーロッパではあるが、現在まで様々な民族が同居している国家だ。さらに歴史的にみれば8世紀から15世紀末にかけてはイスラムの文化圏となっており、世界遺産となっているアルハンブラ宮殿もイスラム時代に建てられたものである。スペインの伝統文化はこれらの混合によって生まれた。加えて、かつてジプシーと呼ばれたロマ民族も非常に多く住んでいるからこそ、ビゼーの『カルメン』はスペインが舞台となり、この国の伝統音楽を取り込んだのである。

■ ヴィラ=ロボス： ブラジル風バッハ第4番より 第1曲「前奏曲」、第4曲「踊り」

幼少期の▶
ブラジル音楽から

幼い頃から楽器に親しみ、街中の音楽や伝統音楽をまず身につけていったエイトル・ヴィラ=ロボス(1887~1959)。西洋のクラシック音楽に開眼したのは、1913年に結婚したピアニストのルシーリア・ギマランエス(1886~1966)と出会ってからだったとされる。1918年頃、既に名ピアニストとして活躍していたアルトゥール・ルービンシュタイン(1887~1982)と出会い、彼がレパートリーに加えたお陰で、ブラジル国外でも知られる存在になっていく。1923年からはヨーロッパに何度も足を運んだ。

モダニズムから▶
新古典主義へ

1930年代のヴィラ=ロボスは、1932年に音楽教育芸術庁の長官に就任する等、母国の音楽教育環境の向上に尽力。作曲家としてはモダニズムの影響から脱して、新古典主義風の作品が増えてゆく。その代表例となったのが1930~45年にかけて第1~9番まで書かれたブラジル風バッハである。必ずしもヨハン・セバスティアン・バッハの様式によっているわけではなく、古典の象徴として名が冠されているに過ぎない。1930~41年にかけて作曲された第4番はもともとピアノ独奏曲で、1941年に管弦楽へ編曲された。第1曲「前奏曲」は弦楽だけの編成。バロック風の和音進行だが、ブラジリ的なサウダージ(郷愁)が表出する。第4曲「踊り」はミウヂーニョという、もともとは黒人男性による細かく足が動く

ダンス。管弦楽編曲されることで、荒い力強さが強調されている。

[楽器編成]フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、タムタム、弦楽5部。

■ ロドリゴ：アランフェス協奏曲

旅の印象をもとに ▶

病により3歳で失明するも音楽の才能を見出されたスペイン出身のホアキン・ロドリゴ(1901~99)。1927年にはパリへ留学するまでになり、秘書や1933年に結婚したピアニストだったヴィクトリア・カムヒの協力によって五線譜に記譜していた。その妻との新婚旅行で訪れたアランフェスでの印象をもとに、スペイン内戦(1936-39)のさなかにパリで作曲されたのがこの協奏曲だ。妻の言葉とともに巡った美しい離宮や噴水のあつ庭園を通じて、画家ゴヤが活躍した18世紀末の古き良き時代のスペインに思いを馳せたのだ。

曲の構成と音楽の特徴 ▶

第1楽章はソナタ形式。第1主題は8分の6拍子を、2拍子あるいは3拍子と読み替えていくことで、生き活きとしたリズムを生み出す。より軽やかな第2主題やその後に続く展開部では転調を繰り返すので色彩的だ。

有名な第2楽章の旋律は、長らくゲルニカ爆撃への哀悼とも噂されたが、作曲者の妻は第1子を流産した夫婦の悲しみが反映されていると後年になってから語っている。冒頭の旋律が変奏・転調を繰り返すことで、感情が溢れ出してゆく。

第3楽章の核となるのは「3拍子×1+2拍子×3」という変拍子による主題。主にこのメロディを変奏していくのだが、まるで風光明媚なアランフェスの景色が次々と目に浮かぶような音楽だ。

[楽器編成]ギター独奏、フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、弦楽5部。

■ ヒナステラ：バレエ音楽『エスタンシア』組曲 op. 8a

作曲の経緯 ▶

タンゴの革命児アストル・ピアソラの師匠としても知られるアルベルト・ヒナステラ(1916~83)。7歳から音楽を学びだし、12歳でブエノスアイレスのウィリアムス音楽院に入学するが、作曲家を本格的に志すのは14歳の頃、ストラヴィンスキーの『春の祭典』に衝撃を受けてからだという。記念すべき作品番号1となったバレエ音楽『パナンピ』(1934~36)は、明らかに『春の祭典』を下敷きにしている。この『パナンピ』が評判となったことで、アメリカン・バレエ・キャラバン(後のニューヨーク・シティ・バレ

エの前身)から依頼されて作曲したのが『エスタンシア』だ。依頼してきた団体が解散してしまったため、本日演奏される4つのダンスを抜粋した組曲版で1943年にまず初演された。

バレエと組曲 ▶

バレエではエスタンシア(農場)を舞台に、「夜明け」「朝」「昼」「夜」「夜明け」という全5場で、南米の牧童であり、カウボーイでもあるガウチョたち(先住民とスペイン系の混血)の生活を描いている。第1曲「農場で働く人々」、第2曲「小麦の踊り」、第3曲「牧場の牛追い人」は、バレエでは第2場「朝」にあたる。第4曲「終幕の踊り」だけは第5場「夜明け」からとられたもので、力強い男性の民族舞曲マランボが踊られる。

[楽器編成]フルート(ピッコロ持替)、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、タンバリン、シンバル、小太鼓、トライアングル、テナードラム、カスタネット、タムタム、吊しシンバル、大太鼓、シロフォン、ピアノ、弦楽5部。

■ ビゼー：『アルルの女』組曲第1番(全曲)

組曲第2番より 間奏曲、ファランドール

『カルメン』前年の作曲 ▶

現在では最も上演されるフランス・オペラとなっている『カルメン』(1873~74)だが、作曲者ジョルジュ・ビゼー(1838~75)の生前には成功を収めることが出来なかった。『カルメン』を作曲しはじめる前年、1872年に演劇の付随音楽として書かれた『アルルの女』の上演も途中で打ち切られている。

作曲家セレクトによる第1組曲 ▶

しかし、年下の友人ジュール・マスネ(1842~1912)らから、音楽自体は評価されていたため、ビゼー自身が4曲を抜粋したのが組曲第1番である。第1曲「前奏曲」は、その名の通り演劇の上演前に演奏される楽曲。第2曲「メヌエット」と第4曲「カリヨン」は、主人公の婚約を祝う音楽。第3曲「アダージェット」は、両思いでありながらも長年離れ離れになってしまった年老いた羊飼いとその恋人を象徴する。

ギローによる第2組曲より ▶

そしてビゼーの死から4年後、出版社の企画で友人エルネスト・ギロー(1837~92)によって作られたのが組曲第2番である。こちらも全4曲からなるが、本日はそのうち2曲を抜粋する。第2曲「間奏曲」は嘆き悲しむ主人公を描いた音楽で、物語の悲劇的な結末を想起させる。第4曲「ファランドール」では、「前奏曲」の旋律が回帰し、終盤では軽快なメロディと重ね合わされるが、実はこれ、ギローによる独自のアイデアなのだ。

[楽器編成]フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、アルトサクソフォン、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、タンバリン、シンバル、ハープ、弦楽5部。